

「ふがない僕は空を見た」 ★★

2012 (平成24) 年11月25日

鑑賞<テアトル梅田>

監督：タナダユキ

原作：窪美澄『ふがない僕は空を見た』（新潮社刊）

斉藤卓巳（高校生）／永山絢斗

岡本里美（“あんず”と名乗るアニメ好きの主婦）／田畑智子

斉藤寿美子（卓巳の母、助産師）／原田美枝子

福田良太（卓巳の親友）／窪田正孝

田岡良文（元予備校教師）／三浦貴大

あくつ純子／小篠恵奈

松永七菜／田中美晴

岡本マチコ（里美の姑）／銀粉蝶

長田光代（寿美子の助手）／梶原阿貴

西村あや（妊婦）／吉田羊

野村先生（卓巳の担任の先生）／藤原よしこ

岡本慶一郎（里美のマザコンの夫）／山中崇

有坂研二（福田がバイトするコンビニの店長）／山本浩司

2012年・日本映画・142分

配給／東京テアトル

◆ 『赤い文化住宅の初子』（07年）と『百万円と苦虫女』（08年）を観て、私はその女流監督タナダユキに注目した（『シネマルーム13』214頁、『シネマルーム20』324頁参照）。ただ、その次の『俺たちに明日はないっす』（08年）はそのタイトルだけで観る気がしなかったし、その意味では『ふがない僕は空を見た』というタイトルの本作もまったく同じだった。しかし、予告編であんず役を演ずる田畑智子のコスプレ・セックスシーンを見て、やっぱりこれは観ておかなくちゃ、という半分義務感で劇場へ。今時の若者を主人公としたこの手の映画には、若者たちのバカさ加減に嫌になることが多いのだが・・・。

◆ 映画冒頭、予告編で見た衝撃のコスプレ・セックスシーン(?)が登場するが、なぜあんず（田畑智子）は高校生の斉藤卓巳（永山絢斗）とこんな行為を？それは、あんずの夫・岡本慶一郎（山中崇）のマザコンぶりや、子どもができないあんずに対する慶一郎の母親・岡本マチコ（銀粉蝶）の当たりのきつさをみればわからないでもないが、だからといって今時の若い妻はホントにこんなことをしているの？またこんな妻にも同情すべきなの？

そんな疑問を持ちながらストーリーを追っていると、いつの間にか卓巳とあんずはポロポロにされてしまったうえ、主人公が卓巳の親友である福田良太（窪田正孝）の方へ。あれれ、これはナニ・・・？

◆ 後でパンフレットを読むと、本作は第24回山本周五郎賞を受賞した窪美澄氏の同名小説を映画化したものだが、原作はいくつかの章に分かれているらしい。つまり本作は、あんずや卓巳さらには元予備校教師でヘンな性癖を持つ田岡良文（三浦貴大）たち、今風の悩みを抱えた若者たちの青春群像劇なのだ。11月26日に観た『96時間 リベンジ』（12年）はテーマが1つだけということもあって92分だったが、本作は何と2時間22分とバカ長い。

私としては、助産師として日々頑張っている卓巳の母親・斉藤寿美子（原田美枝子）や、その助手をしている本音バリバリの女・長田光代（梶原阿貴）の生き方やセリフには納得できるが、それ以外の登場人物たちの生き方やセリフには時間が経つにつれて腹が立つばかり。とりわけ、卓巳や福田を教えている学校のアホバカ女教師、野村先生（藤原よしこ）の姿を見ていると、むかつ腹が・・・。

◆ 『赤い文化住宅の初子』や『百万円と苦虫女』では、両作の女主人公の世の中に対する反発心やそれに根ざした独自の生きざまに共感を覚え、応援しようという気になった。しかし、本作で共感を覚えるのはホントに厳しい状況下で文句も言わず黙々と生きている福田くんぐらいで、あんずと共に本作のダブル主演を務めた永山絢斗演ずる卓巳には共感の余地はまったくなし。また、コスプレ・セックスがバレたため離婚してくれと懇願しておきながら、それが許されないとなると、姑と夫に従って不妊治療のためアメリカに赴くというあんずのいい加減さにもウンザリ。さらに、多分タナダユキ監督が信奉しているのではないかと思われる「自然分娩」の尊さをそんな展開の末に見せられてもそれに同調することはとてもとても・・・。正直、今回は時間のムダだった・・・。

2012 (平